

第1回 全体研究会

日 時：2014年4月9日（水）18：00～20：00

テーマ：「胡耀邦と習仲勲」

報告者：李 勝平（胡耀邦史料情報網代表）

司 会：高橋 伸夫（慶應義塾大学）

場 所：大学院校舎8階 東アジア研究所 共同研究室1

使用言語：日本語・中国語（逐語通訳）

本年度の第1回全体研究会は、1980年代後半に中国の人事制度改革方案の研究に参与した李勝平氏をゲストとして迎えた。李氏はまず冒頭で1980年代の中国は様々な改革の可能性を含んでいたと回顧した。その後、昨年中央文献出版社から出版された『習仲勲伝』を手がかりに、改革の道程における二人のキーパーソン、胡耀邦と習仲勲の役割を分析する報告を行った。

改革開放を率いた胡耀邦の役割と思想は現在よく知られるようになったが、彼の開明的な政策志向こそが政治的な失脚を導いたとされている。胡氏に対する公式的な名誉回復が未だにされないが、彼に対する評価は中国の今後の方向性を示すものだと報告者は主張した。特に、胡氏の最有力の助手であり現在の国家主席・党総書記習近平の実の父親である習仲勲の役割と胡＝習の緊密な関係をどのように論じるかは微妙である。これを正面から記述し、高く評価した『習仲勲伝』の出版は、実に政治的な意義が大きいと考えられる。

報告者は1960年代から1980年代に渡り、習と胡の協力関係を示す重要な歴史事実を紹介したうえで、彼らが今日の中国に残した政治的遺産は1978年以來の改革開放路線の堅持であると評価した。また、習仲勲に対する評価を通じて党が胡耀邦の名誉回復とその路線の継承を示唆していると力説した。会場からは、靖国参拝に対する中国指導者の態度とその政治的立場の因果関係や、習近平政権の改革開放路線の継承の可能性などの質問が寄せられた。